イエスのことば　第 11 回

「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」（ルカ 4：21）

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、**メシア宣言**を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わすも、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から**十字架**、復活、昇天

□文脈の確認

1. 前回から、「承」の部に入った。イエスが幾つもの出来事を通してメシアとしての権威を現わした時期である。前回は、病の癒しに関する権威を現わした出来事、**カナ**での「遠距離かつ即時」の病の癒しであった。
2. 今回は、教えに関するメシアの権威を示した出来事である。聖書箇所は、ルカ 4：16～30、イエスが故郷のナザレで教えたときの記事、そしてルカ 4：31～32、宣教拠点をカペナウムに置いたとの記事である。
3. ルカ 4:32 は記す、「人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである」。「そのことばに権威があった」とは、どのような意味か、その点も含めて、本日のイエスのことばを学ぶ。

□本日のアウトライン　聖書箇所　ルカ 4：16～32

A) 安息日における会堂での聖書朗読　（4：16）

B) イエスによる聖書朗読　（4：17～19）

C) イエスは当時のラビたちの掟を破った（4：20～21）

D) 会衆の驚き、とまどい、そして憤り　（4：22～31a）

E) 宣教の拠点をカペナウムに　（4：31b～32）

A) 安息日における会堂での聖書朗読（4：16）

16 節　それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、いつもしているとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた。

(1) それから・・・

① イエスは、紀元 27 年の春、過越の祭りのときに、ユダヤ地方のエルサレムでメシア宣言をし、多くの人々の前でしるしを行われた（ヨハネ 2：23）。

② その後、しばらくユダヤ地方で活動したが（ヨハネ 4：1～2）、先駆者ヨハネがヨルダン川対岸のペレヤ地方で捕らえられたと聞いて、ユダヤ地方を離れ、ガリラヤ地方に戻った（マタイ 4：12、ヨハネ 4：3）。

③ そのときには、ペレヤ地方を通るのを避けて、サマリヤ地方を通った（ヨハネ 4：4）。サマリヤ地方では、スカルという町の人々がイエスをメシアとして信じた。

④ ガリラヤ地方に帰ったとき、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも過越の祭りに行っていて、イエスが祭りの間にエルサレムでしたことを見ていたからであった（ヨハネ 4：45）。

⑤ ルカ 4：14、「イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた。すると、その評判が周辺一帯に広まった」

⑥ ガリラヤのカナという町では、遠距離かつ即時の癒しの奇跡を行った（ヨハネ 4：46～54）

⑦ ルカ 4：15、「イエスは彼らの会堂で教え、すべての人に称賛された」。

(2) いつもしているとおり安息日に会堂に入り・・・

① イエスは、15 節にあるように、ガリラヤ地方の町々を巡回し、安息日には会堂で教え、人々の称賛を受けていた。

② そのいつものとおりに、このたびは故郷の町ナザレで、安息日に会堂に入り、人々に教えようとされた。

(3) 朗読しようとして立たれた・・・

① 当時の習慣・・・聖書箇所を朗読するときは「立って」。ラビ（教師）が教えるときは「座って」。

② ここでの展開・・・16 節でイエスは「朗読しようとして立たれた」。そして 20 節で「座った」→会衆は、イエスがラビとして教えを語ろうとしていると理解し、イエスの発言を待った。そして 21 節で「イエスは人々に向かって話し始められた」

③ 聖書の朗読に関するラビたちによる掟

- モーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）＝トーラー、3 年サイクルで週ごとに読む箇所が決まっていた。
- 会衆の中から 7 人の男性が読み手となる。

- 7番目の読み手は、先の6人より少ない節数を読まねばならない。ただし、3 節を下回ってはいけない。
- 7 番目の読み手は、トーラーの箇所を読み終えたら、預言者の巻からの箇所を読む。預言者の巻からの朗読は、21 節以上を読まねばならない。

B) イエスによる聖書朗読（4：17～19）

(1) 17 節　すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その巻物を開いて、こう書いてある箇所に目を留められた。

① 聖書朗読において、イエスに預言者の巻が手渡されたということは、この日の朗読においてイエスが 7 番目の読み手であったことがわかる。

② イエスはトーラーの箇所の定められた部分を朗読したはずであるが、この記事の中では、それは省かれている。

(2) 18～19 節　この朗読は、イザヤ 61：1～2 と 58：6 の組み合わせである。

① イザヤ 61：1 と 58：6 の組み合わせで、ルカ 4：18

② イザヤ 61：2 は、最初の部分だけ読んで、ルカ 4：19

③ イザヤ 61：2 の後半、「神の復讐の日」に関する部分は読まなかった。

④ 「神の復讐の日」とは、メシアの再臨直前における大患難期を意味する。イザヤ 61：2b～3 は、メシアの再臨に関係する預言である。

イザヤ書	ルカ福音書
61：1　神である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。 捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、	4：18　主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。 捕らわれ人には解放を、 目の見えない人には目の開かれることを告げ
58：6　わたしの好む断食とはこれではないか。悪の束縛を解き、くびきの縄目をほどき、虐げられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。	4：18　虐げられている人を自由の身とし、
61：2　主の恵みの年、われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。	4：19　主の恵みの年を告げるために

C) イエスは当時のラビたちの掟を破った（4：20～21）

(1) 20 節　イエスは巻物を巻き、係りの者に渡して座られた。会堂にいた皆の目はイエスに注がれていた。

① 会衆は、イエスがラビたちの掟に従い、7 番目の読み手として、預言者の巻から節数で数えて 21 以上の箇所を長々と読むものと当然思っていた。ところが、イエスは、わずか数節を読んだだけで、預言者の巻を巻き戻して閉じ、係の者に渡してしまった。

② これは、明らかにラビたちの掟、当時の会堂における習慣を破るものであった。しかも、イエスは、「座られた」。すなわち、これから会衆に教えを話そうという姿勢である。

③ この異例な聖書朗読を受けて、会衆の目はいっせいにイエスに注がれた。

(2) 21 節　イエスは人々に向かって話し始められた。「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」

① 今日（きょう）・・・イエスが語っているその時点で、朗読した部分の預言は、成就したと宣言。朗読しなかったイザヤ 61 章 2 節後半以降は、まだ成就していない。

② メシアの初臨の目的は、4：18「良い知らせを伝えるため」である。良い知らせ、福音（ふくいん）には、いろいろな内容がある。それを宣べ伝えることである。

③ 他方、メシアの再臨の目的は、イザヤ 61：2 の後半にあるように、「われらの神の復讐の日を告げる」ことである。

④ イエスが言ったことば、「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました」とは、イエスが自分でイザヤのメシア預言の一部を成就していると言っているわけである。イエスが自分自身をメシアであると宣言したことを、会衆たちは当然理解した。

D) 会衆の驚き、とまどい、そして憤り（4：22～31a）

(1) 22 節 a　人々はみなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いて、

① ここでイエスは、人々にかなりの内容のことを語ったはずである。福音書はその内容を記していないが、そのときの人々の反応に着目している。

② 恵みのことば・・・イエスは、メシアとして、良い知らせ、福音を語った。当時のラビたちが語り教えた口伝律法とは、まったく違っていた。

③ その結果、人々は、イエスの教えに感銘を受け、驚き、イエスをほめた。しかし、同時にイエスの生い立ちを知る故郷の人々にとっては、とまどいも生じた。それが次の会衆の疑問のことばに現れた。

(2) 22 節 b　「この人はヨセフの子ではないか」と言った。

① 人々はイエスを知っていた。イエスの両親のことも知っていた。

② ここは、イエスの故郷である。人々は、イエスが子どもの頃から成長していくさまを間近で見ていた。ラビとなるための正規の教育を受けていなかったことも。

③ 人々がとまどったのは、その点であった。確かに、今、ここでイエスが語ったことばは素晴らしいし、驚いた。しかし、この内容は本当にイエスが自分のことばとして語っているのか、あやしい。どこかの偉い先生から聞いたことを話しているだけかも・・・

(3) イエスの応答　23～27 節

① 23 節では、イエスは人々に「ここでしるしを見せてくれと思っているだろう」という意味のことを語る。ナザレの人々は、イエスがそれまで行った奇跡をまだ自分たちの目では見たことがなかったようである。

② このような会衆に対して、イエスは、旧約聖書から 2 つの出来事を引用した。一つは、預言者エリヤの時代、イスラエルにも多くのやもめがいたが、神は異邦人のひとりのやもめのところに、エリヤを遣わした。もう一つは、預言者エリシャの時代、イスラエルにも多くのツァラアト患者がいたが、癒されたのはシリア人のナアマンだけであった。

③ イエスがこの 2 つの事例を挙げた理由・・・イスラエルの指導者や民が、預言者エリヤやエリシャを拒絶したように、この時代にあっては、イエスを拒絶するであろう。24 節「預言者はだれも、自分の郷里では歓迎されません」→直訳「預言者はだれも、自分自身の国では受けいれられない」

④ イエスの心の中の思いは・・・ナザレの人々、ひいてはユダヤ人全体がイエスを拒否し、メシアとして認めないであろう。しかし、異邦人はイエスをメシアとして受けいれるであろう。

(4) 会衆の憤り　28～31 節 a

① イエスの応答を聞いて、会衆の怒りに火がついた。

② ナザレの町の南側は、崖である。眼下にイズレエルの谷を見下ろす。

③ 怒りに駆られた人々は、イエスをその崖まで連れて行き、そこから突き落とそうとした。

④ しかし、イエスは彼らのただ中を通り抜けて、出て行かれた。

⑤ そして、イエスは、ガリラヤの町カペナウムまで、歩いて下っていかれた。

E) 宣教の拠点をカペナウムに（4：31b～32）

(1) そして安息日には人々を教えておられた。

① 33 節には、「そこの会堂に」とあるので、教えておられた場所は、カペナウムの会堂である。イエスは、この町を宣教の拠点とした。

(2) 人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである。

① ことばに権威があった・・・

- マルコ 1：22「人々はその教えに驚いた。イエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。」
- イエスは会堂に入って、人々を教えようとした。問題は、それはどのような権威によるのか？　一般的にラビたちは、彼らが所属する学派から権威を授かった。しかし、イエスはどの学派にも属していなかった。
- 律法学者たちのように・・・ラビたちの教え方とは、連綿と続くその学派の先生たちの教えにさかのぼり、あの先生はこう言った、この先生はこう教えた、といって、その学派が形成してきた理論を語る。すなわち、その権威は、人間が築いてきた伝統に基づくものであった。
- 権威ある者として・・・ラビたちとは異なり、イエスは、自分自身に権威がある者として語った。

② イエスの権威は、どこから来たのか

- ヨハネ 3：31～36　上から来たもの、すなわち父なる神からであった。教えにおける権威は、どのようにして来たのか
- イザヤ 50：4～5　神である主は、わたしに弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとにわたしを呼び覚まし、私の耳を呼び覚まして、わたしが弟子として聞くようにされる。神である主は、わたしの耳を開いてくださった。わたしは逆らわず、うしろに退きもしなかった。
- これは、メシア預言である。少年期のイエスは、朝ごとに、父なる神から呼び覚まされ、父なる神から直接、教えを受けた。